

平成 21 年 6 月 25 日現在

研究種目：若手研究（B）
 研究期間：平成 19 年度 ～ 平成 20 年度
 課題番号：19720015
 研究課題名（和文） 『ナーマサンギーティ』の諸註釈書に見られるインド仏教思想の解釈の展開について
 研究課題名（英文） A study on the change of interpretation of Indian Buddhist Philosophy seen in the Namasamgiti commentaries
 研究代表者 SHAKYA, SUDAN
 種智院大学・人文学部・講師
 研究者番号：60447117

研究成果の概要：

『ナーマサンギーティ』（以下 NS）は、種々の名をもって文殊を称讃する文献である。これまでの研究によって、NS においては、文殊を頂点に置いて「本初仏」（すべての仏菩薩の根源となる者）として解釈をしており、智慧を象徴する菩薩であるだけでなく悟りへ導く者として説示していることがわかった。

また、NS の第 115 偈頌を典拠として、インド仏教において膨大かつ重要なマンダラとして認識されている「法界語自在マンダラ」が説かれていることが今回の研究で明らかになった。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
平成 19 年度	700,000	0	700,000
平成 20 年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,400,000	210,000	1,610,000

研究分野：

科研費の分科・細目：

キーワード：インド思想、仏教学、インド密教、仏教文献、ネパール仏教、文殊、『ナーマサンギーティ』、「法界語自在マンダラ」

1. 研究開始当初の背景

「『ナーマサンギーティ (Namasamgiti, 文殊真実名経)』（以下 NS）を知らない者は持金剛の智身を知らない。持金剛の智身を知らない者は真言乘 (mantrayāna) を知らない」と仏教史で最も遅れて成立したとされる『カーラチ

ャクラ・タントラ』の註釈書『ヴィマラプラバー』が説くように、NS は仏教タントラ（密教経典）の教義上の根幹となる重要な文献として認識されている。NS のサンスクリット校訂本は 1887 年にロシアの学者ミナイエヴに

よって発表されている。しかし、この經典に関する研究はあまりなされていない。最近改めて、*NS*がネパール仏教はじめインド仏教・密教を研究する上で不可欠であることが再認識され、その方面の研究が注目されている。

*NS*は8世紀にインドで成立したとされている仏教タントラである。これは167の韻文と散文によって構成されており、韻文部分は、文殊の様々な名前を列挙し唱えることで、彼の特質を称讃する内容となっている。一方、散文部では、その“名を唱えることによって得られる功德”が説かれている。*NS*そのものには特定の思想や儀礼等は説かれてはいない。裏を返せば柔軟な解釈が可能であり、結果的に複数の註釈者がそれぞれの立場から註釈をした文献が生まれた。チベットの大学僧プトンは、それらの註釈文献を三種—①瑜伽タントラ流儀からの註釈、②無上瑜伽タントラ流儀からの註釈、③時輪タントラ流儀—に分類している。このように一つの經典が複数の異なる立脚点から解釈されていることは仏教史上、稀である。

*NS*はネパールやチベットの仏教寺院で今日でも毎日唱えられ、広く親しまれ、かつ同経に対する註釈及や儀礼文献等がチベット大蔵經典に200あまりの諸文献が収録されている。さらにサンスクリット語写本、またはネワール語を混えたサンスクリット語写本も多く現存している。このように、生きた伝統と共に豊富な資料が存在するという利点に注目し、本研究者は博士論文のテーマとして *NS* を取り上げた。その際、現存する多くの註釈書の中、上述した①瑜伽タントラの立場からの諸註釈、特にマンジュースキールティ(9-10世紀)が著した『ナーマサンギーティ大註釈』(Tohoku 2534, Otani 3357; 以下 *NSI*)を中心資料とし、その立場から *NS* がどのように解釈されているかを考察し、その

全体像を明らかにした。

2. 研究の目的

本研究の目的は、上記の三種の分類を用いて、*NS*の内容が複数の註釈者からどのように解釈されているかを考察する。*NS*における同じ箇所に対するそれぞれの註釈者の異なった解釈を比較・分析することを通じて、仏教思想における概念的な言葉の解釈の展開を探ることを目的とする。

3. 研究の方法

(1) 本研究においては文献研究と現地調査研究の二つの方法をとる。すなわち、複数の立場から著された *NS* に関する諸註釈にネワール語の写本(「ネワール語」という地元の言語で書かれた文献であるためこれまであまり扱われてこなかった)を使用した詳細な文献研究と、ネパールの仏教寺院における現地調査を行う。

(2) まず、*NS* に関するサンスクリット語原典、チベット語訳、漢訳の諸文献を扱うだけでなく、ネパールで流布しているネワール語を混えたサンスクリット語の写本も扱う。中心資料として①瑜伽タントラの立場からの諸註釈、特にマンジュースキールティ(9-10世紀)が著した『ナーマサンギーティ大註釈』(Tohoku 2534, Otani 3357; 以下 *NSI*)に加え、②無上瑜伽タントラの立場からの註釈書であるアドバヤバジュラ(11-12世紀)著『ナーマサンギーティ広釈』(Tohoku 2094, Otani 2943; 以下 *NSII*)、③時輪タントラ流儀からの釈書であるラビシューリージュニャーナ(12-13世紀)著『アムリタカニカー』(Tohoku 1395, Otani 2111; 以下 *AK*)を用い、その解読を行う。また、必要に応じてマーチャミカナダ(Tohoku 2540; Otani 3357)、ヴィラーサヴァジュラ(Toh 2533; Ota 3356)、チャ

ンドラゴーミン (Tohoku 2090; Otani3363) 他の註釈者が表したのも参照し、諸註釈者による *NS* の内容の解釈の変遷をみる。

(3) 今回はネパールに伝わっている *NS* の解釈も参照する。これに関して、サンスクリット語とネワール語が混ざっている写本を精読する。その際、「ネパール・アーカイブ」や地元の僧侶が個人的に持っている写本（特に 18-19 世紀にネパールで活躍したアムリターナンダ等著名な学者の著作にみる解釈を含むもの）を用いる。さらに、ネパールのバハーとバヒーと呼ばれているカトマンズ盆地の仏教寺院に伝播されて *NS* 及びそれに関する儀礼・図像の調査を行なう。

それまでに精読した諸資料 (*NS* の三種の立場からの註釈書及びネパールに伝わっている解釈) の内容を考察する。本研究の成果を自らの言語能力を駆使し日本語、英語、ヒンディー語、ネパール語、ネワール語で国内外の学会で幅広く公開する。収集した資料、及び研究成果をより効率的に活用できるようにデジタル化したデータのオンライン化に努める。

4. 研究成果

(1) 第一年目 (平成 19 年度) は、『ナーマサンギーティ』(以下 *NS*) に関する註釈の中で、マンジュシュリー・キールティ著『ナーマサンギーティ大註釈』と共にアドヴァヤヴァジュラ著『ナーマサンギーティ広釈』) 及びラヴィシュリージュニャーナ著『アムリタカニカー』の精読を行なった。さらに、*NS* 関連の文献として、マーチャミカナンダ著『ナーマサンギーティ註』(Tohoku 2540、Otani 4831) に加え、マンジュシュリー・キールティ著『マンダラ儀礼』(Tohoku 2589、Otatani 3416) の解読を進めた。

(2) 二年目 (平成 20 年度) にも *NS* に関する諸註釈の精読を引き続き行なった。

さらに、他の文献とのより詳細な比較を目的として、仏教文献全体で文殊の解釈がどのように展開されてきたかを明らかにすることを試みた。特に、仏教タントラ文献に見られる文殊の位置づけを明確にするために、これまでの註釈文献に加えて、『大日経』を始めとする諸タントラとそれぞれの註釈文献などに見られる文殊に関する記述の解読を進めた。

(4) ネパールにおける *NS* の受容形態や伝承の在り方を明らかにするために、ネパールの仏教寺院において、そこに伝わる読誦の手法、儀礼、マンダラ、図像の記録・写真撮影を行った。さらに、文献的に解釈の受容を分析するために、現地で収集した個人所有の *NS* に関連する写本 (ネワール語による註釈が加えてあるもの) に加えて、現在英国のケンブリッジ大学に保管されている写本、特に Bendall Catalogue No. 1323 の解読をも進めている。

そこでこれまで得られた成果の一部をここで報告する。

①既に述べて来たように *NS* にはマンダラなどに関する言及が存在しない。「法界語自在マンダラ」はインド密教において重要なマンダラとして認識され、これは *NS* に基づいたマンダラとして知られている。しかし、それを説く典拠となっている偈頌は明らかにされていない。そこで、上記で示した文献の記述を考察した結果、「法界語自在マンダラ」を説く典拠は *NS* の第 115 偈頌であることを明確にすることができた。さらにその名称は元来の「虚空の如く無垢であり極めて清浄な法界の智の心髄という大マンダラ」から展開したものであることも明らかにした。

また、このマンダラの名称が後に「法界語自

在マンダラ」として広く知られるようになった背景には、アヴァヤーカラグプタ（11-12C）の著作の影響が大きいことも示した。このようにマンダラの典拠やマンダラ名称の変更を明らかにすることはインド仏教思想の成立を解明する上で重要な資料であると考えられる。

②NS では図像の説明も存在しない。しかし「ナーマサンギーティ文殊」として様々な図像が伝わっている。その中でも一面十二臂の「ナーマサンギーティ文殊」の文殊図像はもっとも有名であり、その信仰はネパールでは広く浸透している。そこで、ネパールの仏教寺院、博物館（日本をはじめネパール国外の博物館を含む）、個人蔵など多様な形態で現存する「ナーマサンギーティ文殊」の作例を取り上げ、その典拠と図像的な特徴を考察した。

現存する「ナーマサンギーティ文殊」の作例からみるとそれは新旧の二種に分けられることが判明した。また、現地調査で得られた新しい資料（1571年の奥書を持つ写本）に基づいていけば、旧型の「ナーマサンギーティ文殊」図像の確立が、遅くとも16世紀であることが明確になった。新型の図像は19世紀後半から20世紀の初頭には確立していたことを推測される。また、現在ネパールでは、「ナーマサンギーティ文殊」といえば、旧型よりむしろ新型の図像を指すことが多いも明らかになった。

さらに、この一面十二臂の「ナーマサンギーティ文殊」は「ナーマサンギーティ」に説かれる本初仏としての文殊の姿をネパールにおいて図像化したものであると考えられる。

③ 大乘文献における文殊については既に研究がなされており、智慧を司る文殊菩薩は、最初教主の一人として登場するが、後にその

地位が次第に向上し「一切仏・菩薩の母父」としての解釈にまで至る。タントラ文献中でも『大日経』には眷属の一人として登場し、智または煩惱を能断する般若を象徴する。

『理趣広経』や『超勝三界経』において文殊はマンダラの中尊となる。そして、NSにおいては文殊を頂点に置き、「本初仏」として進化させている。つまり、文殊は智慧を象徴する菩薩であるのみに留まらず、悟りへ導く者となり、やがて「本初仏」というすべての仏菩薩の根源となる者として展開していくことが明らかになった。「本初仏」という言葉は最も遅れて成立したタントラの『カーラチャクラタントラ』の重要な述語でもある。故に、同タントラの成立を探る上で重要な資料であり、インド仏教思想の流れを知ることにもつながると考える。そのために「本初仏」あるいは「本初仏思想」の更なる考察を要する。そこで文殊を「本初仏」とし、また「本初仏」の意味を含む多くのキーワードが用いられている文献は他でもなく NS そのものであるため、その註釈類に見られる解釈を検証することが今後の課題となる。

上記の研究成果は既に学会で発表しており、さらに学術雑誌にも既に掲載されている。さらにこれまで得られた成果（文献解読と現地調査によるもの）を更なる研究に加え、今後とも学会で発表し、学術雑誌に掲載する予定である。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計4件）

(1) スダン・シャキヤ (SHAKYA SUDAN) 「仏教文献に見られる文殊師利の解釈の展開について」『密教学』第45号、2009年、pp. 85-111、審査有り

(2) スダン・シャキヤ (SHAKYA SUDAN) “The interpretation of Mañjuśrī in the Buddhist Literatures”（仏教文献に見られる文殊の

解釈の展開について) *The Proceedings of the 2008 Korean Conference of Buddhist Studies* 2008, Special Volume, pp. 605-613, 審査有り

(3) スダン・シャキヤ (SHAKYA SUDAN) 「『ナーマサンギーティ文殊』の図像と典拠についての一考察」『密教図像』第27巻、2008年、pp. 1-21、審査有り

(4) スダン・シャキヤ (SHAKYA SUDAN) 「『ナーマサンギーティ』と「法界語自在にマンダラ」について」『密教学研究』第40巻、2008年、pp. 60-76、審査有り

〔学会発表〕(計4件)

(1) スダン・シャキヤ (SHAKYA SUDAN) “The interpretation of Mañjuśrī in the Buddhist Literatures” (仏教文献に見られる文殊の解釈の展開について) *The 2008 Korean Conference of Buddhist Studies* (韓国佛教学会)、2008年5月18日、Dongguk University, Seoul (韓国)

(2) スダン・シャキヤ (SHAKYA SUDAN) 「『ナーマサンギーティ文殊』の図像の典拠とその用例をめぐる」密教図像学会、2007年12月16日、大阪

(3) スダン・シャキヤ (SHAKYA SUDAN) 「『ナーマサンギーティ』と「法界語自在にマンダラ」について」日本密教学会、2007年10月13日、東京

(4) SHAKYA SUDAN “The iconography of Nāmasa gīti-Mañjuśrī in Nepal” *The 3rd International Congress of Cultural Atlases (ECAI)*, 2007.05.30, Russian Academy of Science, Moscow (ロシア)

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

○出願状況 (計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：

出願年月日：
国内外の別：

○取得状況 (計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

スダン・シャキヤ (SHAKYA SUDAN)
種智院大学・人文学部・講師
研究者番号：60447117

(2) 研究分担者

(0)

研究者番号：

(3) 連携研究者

(0)

研究者番号：